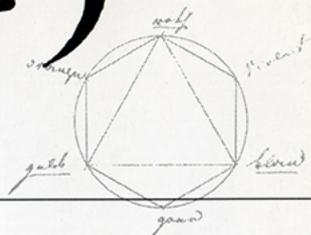


モルフォロギア

ゲーテと自然科学



第29号

2007

特集

[ことばとイメージ]

形態・時空・言葉——シェルドレイクの形態共鳴説とゲーテ的自然学の可能性

桑川 麻里生 2

像と言語

宇波 彰 18

[論文]

根本現象としての音程——ヨーゼフ・マティーアス・ハウアーの音楽理論における
ゲーテ色彩論の受容をめぐって

木村 直弘 28

ゲーテ形態学とスポーツにおける発生運動学的運動分析

佐野 淳 45

ゲーテ形態学の方法が示す龍安寺石庭の意味

森 章吾 63

静かなまなざし——ゲーテ「前批判期」の自然抒情詩について

ヘター・マトッセク(磯崎康太郎訳) 76

近代ドイツ文学における自然科学的基盤

ジェレミー・アドラー(小野あさよ訳) 91

[翻訳]

ヤコビ「スピノザの学説に関するモーゼス・メンデルスゾーン宛の書簡」(8)

田中 光訳 105

[書評]

カッシーラー著「ゲーテ論集」森淑仁編訳

渡邊 直樹 114

嶋田洋一郎著「ヘルダー論集」

濱田 真 118

ゲルノート・ベーム著「雰囲気的美学」

久山 雄甫 120

静かなまなざし

——ゲーテ「前批判期」の自然抒情

「新しい現象学」の創始者ヘルマン・シュミッツは、自らの中心的概念である「内属的 (implantierend) 状況」を説明するにあたって、ゲーテの詩「すべての頂に憩いあり……」を俳句に近いとしている。これはシュミッツによつて付随的に述べられているにすぎないが、さらに立ち入れば、ゲーテのヴァイマル期最初の10年に生まれた自然抒情詩の理解のためには、啓発的なものとなる。実際、俳句の伝統は、ゲーテのその創作期——ゲーテがまだカントの批判哲学の影響下になく、したがつて超越的主体の教訓的な特徴をまだ帯びていないために、私が「前批判期 (vorkritisch)」と呼ぶ時期——における抒情詩の言語を見る目を養つてくれる。日本的なまなざしを「前批判期」のゲーテに向けるのは、文献学的興味からだけではない。それをはるかに超えて、日本的なまなざしがもたらすのは、経験に従いながらも、それを自らの支配下へと導く「われ思う」が存在しないかに見える現象を話題にする可能性である。

以下、ヘルマン・シュミッツの「内属的状況」概念を出発点にして、俳句の伝統のなかで、その状況の抒情的な対応物を示す。その

俳詩について

ペーター・マトウセク

磯崎 康太郎 訳

際、高橋義人の基礎文献「日本の抒情詩——俳句と生きた空虚」に依拠した後、ゲーテ「前批判期」の自然抒情詩を幅広く理解するために、このアプローチの仕方が生産的であることを明らかにする。

ヘルマン・シュミッツが「内属的状况」とみなすのは、一人の人間が「次第に馴染んでいく (Hineinwachsen)」（ラテン語の *implantare* に由来）状况である。それが可能になるのは以下の場合のみである、とシュミッツは述べている。

この共同的、内属的状况が十分に柔軟であり、状況のもつ意義の少なからぬ部分が壊れることにより個々の意味内容へとこわばりつくことがなかった場合である。快活な友情もまた、ある共同で置かれた状況のもつ意義が内的に浸透すること (*Binnendiffusion*) でのみ成立可能である。大小の問題に際し、友人たちは助け合う。このプログラム内容は本来、例の状況の意義に属するものだが、これが細別された個々のプログラムの

形態をとりすぎて、状況の意義から抜け出すことがあつてはならない。というのも抜け出した場合、友情は打算的となり、もはや友情ではなくなるからである。多くの繊細で私的な人間関係は、共同的状況のもつ意義の内的浸透に結びついている。

その例としてシュミッツは、ヘーゲルと彼の婚約者の往復書簡に言及する。この女性は一八一一年夏に、ヘーゲルが自分を愛しているか否か、疑いを抱くようになり、彼に遠方から書面で気持ちを伝えるように頼む。これに答えるのは、ヘーゲルにとって容易なことではなかった。返信は以下のようになされた。

さらに言えば、あなたに手紙を書いたほうがいいのか、長いこと迷っていました。書くこと、話すことはすべて、他方でそれが説明できるかどうかだけにだけかかっているからです。もしくは説明は、それが誘導された場合にとても危険なものになるので、説明を恐れていたからです。——だがこの恐怖心を克服し、こうして書いたものを受け取るあなたの心にすべてを期待します。

ヘーゲルが自らの愛情を説明しなかつたのは、愛情の繊細さに欠けるところがあつたからではなく、説明によってこの繊細さを壊すことを恐れたからである。つまりヘーゲルは、ヘルマン・シュミッツが「内属的状况の内的浸透」を呼ぶものの意を受ける意味でこう対応した。しかしシュミッツによれば、文学は説明しえないものを

説明しうる。この関連においてシュミッツは、本論で私にとって重要な例の複合体 (Konstellation) を話題にしている。

詩は、話を巧みに切り詰めたものと定義されうる。そのために諸状況は (……) たゞ大事に表現されるので、(……) 語りの薄い網こしに屈折のない総体として透けて見える。抒情詩 (俳句等) の場合、これはすぐにはつきりする。ゲーテの短詩「すべての頂に憩いあり」等では、切り詰めることの強制力が大きいので、一行目最後の言葉を省略なく綴れば——「ルー (Ruh)」ではなく「ルーエ (Ruhe)」——、それだけでもう意味深長な抒情的効果を拍なっていたに違いない。

実際、第一行が「Über allen Gipfeln ist Ruhe」だとすれば、抒情的表現は唐突で台無しになったことだろう。雰囲気イメージを捉えた一行から、決定的な一文が生まれている。「e」を省略することで「ルーエ」の美情は、肉体的経験に転じている。「ルー」はある状態を描いているのではなく、解放された呼気の音標であり、末尾で「もまた (auch)」と韻が合う「吹く風 (Hauch)」である。

話を切り詰めることが、俳句にとって一つの基準にすぎないことは言うまでもない。高橋は、俳句に特徴的な点をさらに挙げている。抽象的な言葉や隠喩的な表現 (まさに心情表現も含む) の回避、物に即した具象的で簡明な表現、呼びかけではなく、呼び覚ますような表現形態は、通例、一つの要素が一つの句の切れ目にまたがり、それと明示されることなく繋がることで成立する。——結合された

間は、鑑賞者の心の動きを誘発する。

こうした特徴は、たとえ俳句が志向された場合であつても、ドイツの抒情詩にあまり典型的に見られるものではないという高橋の指摘はもつともである。それだけに、日本の影響とはまったく無縁である、ヴァイマル期最初の一〇年のゲーテが上述の特徴に肉迫していることが確かめられれば、これは一層特筆すべきこととなる。ゲーテの『夜の歌』にはいかなる抽象詞も含まれていない。さすらい人の感情、晩の情感はそれと名指されることなく、三つの簡素に据えられた自然観察の形で表現されている。

すべての頂に

憩いあり。

すべての梢に

感じるのは

吹く風一つないこと

森では鳥たちが静まり返る。

この二つ目の終止符の後に来る中間休止により、視角は観察の対象物から、いまや同じく素朴に憩う者とされる観察者へと転じる。

待つのだ。やがて

おまえもまた憩うだろう。

この結びの文が含意するのは当然のことながら、そこで述べられ

たこと以上の表現である。さすらい人は、森の鳥たちと同じように、もうすぐ眠りにつくことを胸中に告げている。しかし彼は、まさに比較を持ち出すことによって、自然の領域と人間の領域との対照性を暗に示している。——自己投影の要素を通じて、夜の憩いはより高次の意義を獲得している。つまりここで思いが馳せられているのは、自然に周期的に訪れる安息ばかりではなく、自らの死を予期する主体の永久の安息としての死である。

この詩は、ドイツの詩には異例なほど俳句に接近しているために、作者ゲーテの故郷以上に、日本人に愛好されたことは想像に難くない。しかし、ゲーテ年であつた一九八二年に実施された一大アンケートは、まさにこの詩行をいちばん多くのドイツ人が「もつとも好きな詩」に挙げたという結果を明らかにした。われわれドイツ人は、日本的な魂を備えていることだろうか。この詩が自負に足るものだとしても、なぜ「もつとも日本的な」ゲーテの詩がドイツでそれほどまでに好まれたのか、文化内在的な説明が必要である。その説明を以下で施してみたい。

詩の第一歩は、ゲーテの以下の時代の生活状況のうちに見出される。一七八〇年九月六日キッケルハーインのかつての狩猟小屋の板壁に鉛筆で『夜の歌』を書いたとき、ゲーテが平穏な状況にいられるのはごく稀なことだった。夥しい政治上の公務と責務を課され、自らに課していた芸術作品や自然研究にも追われ、相手に恵まれることもなく愛の憧れに絶えず心をかき乱されていた彼は、お決まりのやり方でひと気のない自然に逃れたのだった。

喧騒を離れたキッケルハーインの山小屋は、そのために特に適した

表象 (Repräsentation) の概念が示すのは、表象される普遍といふものが、その表れを無意識的な記号過程 (Semiose) に任せることなく、つねに前提となる限り、「探求しがたいものの生き生きとした瞬間的な啓示」の要求に対峙する代理関係である。ゲーテのこの先験的な措定には、明確な根拠が挙げられている。ゲーテは一七九七年夏のフランクフルト滞在中に、近代の生活状況は、その特殊性がもはや無条件に普遍の具現とは言えないので、そもそもそれがまた象徴的に表現されうるものなのか否か、心を砕いていた¹⁾。そのため例えば、取り壊し後の両親の家が、物理的に破損のない状態にあつたときの価値よりも土地の投機によつてはるかに高価になつたという資本主義の奇妙さを、ゲーテは書き留めていた。抽象——つまりここでは、需要と供給の市場法則——が媒介することによつてのみ、これは理解可能になる。ただ眺めただけでは、そうした関係は分からない。それにもかかわらず、この問題についてのゲーテの解決策は、象徴芸術への要求を断念することではなく、そうした抽象的諸関係を取り込むことができる象徴を定義することにあつた。シラーとの往復書簡のなかで、ゲーテは一七九七年八月九日に、「象徴的対象」についての自らの新たな理解について書いている。重要なのは以下のことである。

ある特徴的な多様性のなかで、他の多くの代表者となり、ある種の全体性を含む、際立った事例²⁾。

しかし、この見解における特殊は、もはやそれ自体高次の意味を

指示せず、その文脈において補助的に働く構造（他の多くの代表者）を要するものであり、ある代表的関連に置かれた範例（特徴的な多様性）にまで格下げされている。

そうした補助的に働く構造——これは非人工的な「最初の自然」と社会的に形成された生活条件である「第二の自然」とが区別されるところでようやく問題になるものだが——を、『さすらい人の夜の歌』は完全に免れている。不動の空、木々の間の風、鳥たちの沈黙についてのこの歌の三つの確認事項はまさに述べられた通りのものとしてそこにあるだけで、それ以上の何物でもない。この三つは何かを代表するのではなく、別のものの代わりをするのでもなく、それ自体のためだけに存在するのだ。

むろん中間休止後の文——「待つのだ。やがて／おまえもまた頷うだろう」——が指示するものは、それ自体を超えている。文字通りに述べられたこと——さすらい人がもうすぐ同じように眠るだろう——は、それ以前に述べられたこととの関連で、二つのより普遍的な意味を生み出している。一方で示唆されているのは、人間は自然の事象に列するということである。自然の事象の夜の想いは、自らの想いのモデルと受け止められている。他方で示唆されているのは、人間の「想い」はその完成において、死という「永久の想い」を予期させることである。この二つの、それ自体を超越している表現は、ここでまさに象徴法を話題にする契機を与える。——ただし、ゲーテの古典期の構想とは区別される象徴法である。森の想いは、人の夜の想いを「表象」するものではなく、人の夜の想いは現世のあらゆる活動の終局を「表象」するものではない。どちらの場合も

問題なのは、特殊が一般を代理する「提喩」——全体を一部で表す技法——ではなく、特殊が含意するものを連想的により一般的なものへとずらす「喚喩」である。

異なる象徴の類型を特徴づけるためにここで持ち出した、提喩と喚喩という二つの用語については、ロマン・ヤコブソンの言語理論にその体系的基礎がある。ヤコブソンの言語理論によれば、喚喩とは「隣接」、つまり連想的、並列的な横滑りによつて作られた語場の拡大であり、ここで記号と意味とは接して繋がった状態にある。ヤコブソンによれば、これに対して隠喩は表象関係の意味で、記号から浮かびあがる意味を記号に示させる。

したがつて、『さすらい人の夜の歌』における象徴法は、提喩でも隠喩でもなく、喚喩の類である。語意は「頂 (Gipfel)」から、下降する視線という「隣接」性によつて「梢 (Wipfel)」へとずれる。他方でその「梢」に喚喩的に連なるのが「森 (Wald)」であり、「鳥たち (Vögelein)」である。「鳥たち」の「沈黙 (Schweigen)」はまたもや「憩い (Ruhe)」への意味の横滑りを引き起す。その「憩い」には、自らの夜の眠りへの思いがつながり、しかし同時に、永久の安らぎへの憧れにもつながる。これらの移行はすべて無理なく、移行すらないと言つてもいいほどに実現される。——自然に後追いでできるような視線の動き、繊細な音の推移 (「Gipfeln-Wipfeln」、「Wipfeln-Walde」、「Vögelein-Schweigen」) を通じて。

つまりこの喚喩的象徴法は、ゲーテが古典期になつて構想するようになつた、代理関係の特徴とする提喩的象徴法とは区別される。ただ、『さすらい人の夜の歌』が唯一の事例ではない。それどころ

かゲーテの生涯において、この時期の自然詩はすべてと云つていいほどに、喚喩的象徴を用いていることが分かる。

話題の時期は、ゲーテのフランクフルトからヴァイマルへの移住で始まる。この移住は、彼の生涯と詩作にとつて意味深長な中間休止となった。そのことはゲーテが最初のスイス旅行中、六月一日に日記に記した詩「湖上にて」から読み取ることができる^⑧。この詩は疾風怒濤期の表現技法を用いて、この活動期の天才的自然感情を特徴とする象徴で始まる。「私はへその緒にて吸う／世界より養分を」。第八行目の後に、外向的な天才の行状を突如として憂鬱な内向性へと転じさせる中間休止がやってくる。「目よ、私の目よ、なぜ沈むのだ／金の夢たちよ、また戻ってくるのか」。この自伝的に作られた詩の唐突な情感の変化は、ゲーテが少し前に婚約していたリリー・シエーネマンとの、いまだ解明されない関係に向けられている。その後まもなく、ゲーテはこの関係を踏み出すことに躊躇するようになった。同じ頃、彼はヴァイマルに招かれていた。つまり、二重の決心を迫られていた。最終的にどう決心したのかは、まさに同系列のものとして次の詩行から読み取ることができる。とつさの身振りで抒情的な自己は、婚姻関係への憧れを押しつけ、自決した冷静さを保つ。「夢よ、去れ。おまえがどれほど金色であろうとも／ここにも愛と生活があるのだ」。それに続く詩行は、新しい生き方の決心を告げ、冒頭のヤンブス（弱強格）からトロヘウス（強弱格）への韻律の変化の形にも表された、完全に変じた知覚様式を伴っている。「へその緒」という隠喩的表現を通して抽象的な「世界」を組み込む代わりに、いまや詩人は、自らを取り巻く自然

現象に接し、その表現は具体化の一途を辿る。——しかも「星」、「霧」、「朝の風」、「湾」、「湖」、「果実」といった表現によって、「輝く」にまつわる喚喩の羅列となる。「遠方」から、その諸現象は主体に近づく一方であり、最終的に主体の前には、自らの状態を再認識する姿が浮かぶ。「そして湖に映し出される／熟れゆく果実が」。

つまりこの一篇の詩には、天才詩学からヴァイマル期最初の一年の喚喩的象徴法へのゲーテの移行が段階的に記されている。「湖上にて」末尾の諸現象は、後の「さすらい人の夜の歌」と同様であるが、それ自体のために存在するものとしては初めて描かれた。やはり「さすらい人の夜の歌」に類似して、視線の動きはまったく気づかないほど、無理なく主体に向かっている。——湖に映し出された熟れゆく果実という自然の形象のなかに、主体は自らを投影する行為の高次の意味を、それと語ることなく求めている。ゲーテもまた自らの姿をチューリヒ湖に映したのであり、侯爵の教育係としてヴァイマルへ赴くという成熟の過程を選択することに決めたのだ。ゲーテの喚喩的象徴法の始まりを述べたが、今度はその終わりのも述べたい。それは「『ファウスト』における」「森と洞穴」の場面でのファウストの独白との関連において考察される。

この場面がいつ書かれたのかは確言できないが、ただ間接的に書簡の見解から、これはおそらくイタリアで仕上げられたものであることが推測できる。ただし、語調と比喩性にはヴァイマル期最初の一〇年の諸経験がはつきりとにじみ出ている。その年月にゲーテが繰り返して企てたのと同じように、ファウストはひと気ない森に逃げ

た。ファウストの「崇高な霊」への謝辞はどうやら、彼が復活祭前夜に独創的な挙動で空しくも召喚した地霊に向けられているようだ。「おまえは無駄ではなかった／おまえは炎のなかで私に顔を向けてくれた」（三二二八行と次行）という表現は、地霊が「炎のなかで」（四八二行後）ファウストの前に姿を現した召喚の場面を明らかに連想させる。地霊を召喚する際に使われた主要語彙も、「森と洞穴」で再び取り上げられる。「力」（四六二行・三三二二行）、「感じる」（四六四行・三三二二行）、「胸」（四五八行・三三三三行）、「生命」（四八一三行・三三二五行）である。それにもかかわらず、自然における経験は、復活祭前夜のそれとは正反対である。大きな誤解と判明した絶対の一体感に代わり、今度は身内のような親近感が登場している。ファウストは、以前は自分に馴染みのなかった自然現象をいまや「兄弟」（三三二六行）と呼ぶ。

だが変わったのは、地霊ではなく、ファウストの見方である。ファウストにとって、自然の霊はもはやたんに「感服される」（三三二二二行）抽象概念の寓意的擬人化の姿で現れるものではなく、具体的な生活表現のなかで自らの素性を告げる「友人」（三三二四行）のような存在である。ここに比喩的文体のかすかな微候が認められるとしても（自然の「懐」は友の胸の「ようだ」）、その独白はまだゲーテの古典期の象徴美学には対応しない書き方によるものである。「さすらい人の夜の歌」や「湖上にて」と同様に、ここでの諸現象は普遍を表象するものではなく、「列」をなす個別的要素である。

おまえは生きたものの列を、
私の前に通らせ、私を引き合わせてくれたのだ
静かな茂みや空中や水中にいる私の兄弟に。

(三三三五行以下)

詩行「素晴らしい自然を王国として私に与え」(三三二〇行)における「王国 (Königreich)」という言葉ですら、ここでは比喩的に理解する必要はない。これは二重に現実と関連するものである。一方でこの言葉は、ゲーテがヴァイマルで習得し始めた自然科学の周知の専門用語を含む。それによれば自然は三つの「領域 (Reiche)」に分類される。他方でゲーテはこれらの領域に関して、ちょうどその時期に、公国の大臣、林業や鉱業等の総監督として実際に統治権を握っていたのである。

そうしたいわば隠喩形成に傾く特徴のなかで、古典期の提喩的象徴法の先取りが見られたとしても、その独自全体は、主として喚喩的象徴法のなかにいまだ置かれている。外部の知覚から自らの知覚へと向かう主体の転換は、ここではまだ——特に後の教訓詩とは異なり——自ら視線を操る形では生じていない。知覚現象を操るのは自然現象そのものである。

そして嵐が森のなかでざわめき、きしめき、
青檜の巨木が倒れかかつて、隣の枝や
隣の幹をばりばりと押し倒し
その倒れる音に、丘が鈍くうつろに雷鳴のように響く

そのとき、おまえは私を安全な洞穴に導き、私に
自らを省みさせた。すると自分の胸に
秘めた深い奇蹟が開かれた。(三三三八—三三四行)

倒れる青檜の巨木によりファウストを洞穴へと「導く」のは、こ
こでは自然そのものである。その洞穴でファウストに彼自身のことを
教えるのは自然であり、ファウストの胸は探索する洞穴のように
開かれているのである。

最終的にファウストが「なごやかな月光のなかで」「岩壁や露に
ぬれた茂みから／前世のさまざまな銀色の姿が」「浮かぶ」のを見
るとき(三三三七行と次行)、昔の自然史へと目を向けたこの姿も
また、完全に具体的なものと言える。なぜならこれは、ゲーテがハ
ルツ山やイルメナウ周辺の散策において調査を始めていた花崗岩の
銀色の輝きのことであるからだ。

われわれが中心として扱った『夜の歌』の例よりも、この場面は
抽象度ははるかに高いにせよ、ここでもまだ人間と自然を関連づけ
ているのは喚喩的な移行である。これは意味論の次元では、並列的
な横滑りの形をとり、ある語意から次の語意へと移っていく言語的
変奏の技法に表れている。〔与えてくれた (gabst) …… 向けてく
れた (zugewendet) …… 与えてくれた (Gabst) …… 許してくれ
る (erlaubst) …… 与えてくれる (Vergönnest) …… 導いてくれる
(führst) …… 教えてくれる (lehrst) …… 導いてくれる (führst)
…… 与えてくれた (gabst) …… 贈り物 (Gaben)〕、「顔
(Angesicht) …… 眺める (schauen) …… 教えてくれる (lehrst)

…… 見せてくれる (zeigst) …… まなざし (Blick) …… 観察 (Betrachtung) …… 姿 (Bild)」。統語論では、こうした変奏の連鎖をなす要素は、「そして (und)」、「それから (dann)」といった接続詞および反復的な接続「私に与えてくれた、私にすべて与えてくれた (Gabst mir, gabst mir alles) …… 私に与えてくれた (Gabst mir) ……」、「それを感じることを、楽しむこと (sich zu fühlen, zu genießen)」で形成された一連の構造で結ばれている。(例はすべて三三二七行—三三二四八行より)

そんな風にファウストが引き合わされた「生きたものの列」(三三二五行)は、つまり言語的な列として認められる。この列には、特定できる限界点がなく、記号と意味との代理関係にいかなる終着点も見出せず、連続的に先へと導かれる。やがてこの列が——まなざしもさまよひ疲れた有様で——徐々に消失する。月光にかすむ輪郭が「観察の厳しい心を和らげる」(三三三九行)。ファウストはここで過度に正確な説明、分析者の厳しいまなざしを断念する。すると「森と洞穴」の独白もまた、ヘルマン・シユミッツが「内的浸透」と呼ぶ、あの特質のなかで安息の場を見出すことになる。

「湖上にて」から「森と洞穴」に至る局面におけるゲーテの自然抒情詩の美学的特徴を描き出したところで、この美学的特徴を、ゲーテが人生の同時期に展開していた科学理論的な背景に関連づけた。

ゲーテはヴァイマル到着の時期を回顧しながら、こう明かしている。「これに対して、そもそも外的な自然というものについて、私は何の考えも持ち合わせていなかったし、そのいわゆる三つの領域

について少しの知識もなかった²⁰。これが変わるのは、この移住者が領王の宮廷で引き受ける職業任務——なかでも造園業と鉱業におけるそれ——を通じて、同時代の自然科学に触れる時点のことである。ゲーテは動物界、植物界、動物界の三領域を学び、これらは『さすらい人の夜の歌』をも構成し（山頂、樹木、鳥、特徴に応じた区別やさらなる細分化がなされている。

しかし、同時代の自然科学の専門用語に対するゲーテの親しみ方は、美学者のそれであつて、その手順は彼の抒情詩と同じく喚喩的であつた。例えば彼は、以下のような愛らしい印象を述べている。

身ぎれいな土地の少年が短いチヨッキを着て、向こうから歩いてきて、草や花の大きな束を差し出し、その全部にギリシヤ語、ラテン語、異邦人の言葉に由来する名前を付けるとしよう。これは男たちにも、おそらく女たちにも、大きな関心を惹く出来事である²¹。

『森と洞穴』の場面のファウストの独白は同質の学習過程を描いている。彼のまなごしは「冷たい目を凝らす」分類学者のそれではない。自然現象が「導き」となり、眺める順序は自然の魅力に委ねられているのだ。「生きたものの列」というゲーテの言い方は、一七八〇年代にまだ通用していた「存在の連鎖」という考え方を暗示している。しかし、「生きたものの列」は自然史上の主流をなしていた文献とは異なつた説明をしている。つまりそれは、不変の秩序としてではなく、連続体として現れる。その独白は確かに、三つの

自然界を相互に区別している。しかしファウストは、自らの「兄弟」である「前世」の霊たちにより生命を与えられているかに見える「岩壁」の鉱物界とまさに同様に、植物界と動物界を「静かな茂みや空中や水中に」認めている。この系譜学的な概観のなかに、自然を研究する詩人の関心事が見取れる。それは、移行形態としての「存在の連鎖」の全構成要素を、それらに共通した力動的性格において捉えることにより、静的な分類を超えて「厳密な（……）区分」に到達しようというものである。地霊のさまざまな現象方法は、ファウストが意味をずらしたもののなかに表現されるもの、つまり同一の生命の動きの一部であり続ける。その「同義の変異」は、客観化をもたらずパラフレーズだけでなく、内と外の視点が自由に繋がる主観的に追体験可能な時間の遂行的表現にも使われる。こうした視角同士の内的浸透により初めて、自然への新たな見方がもたらされる。それは分類学の厳格な線引きに対峙することなく、連続するものとしての移行をありありと示すのである。

ゲーテは、このモデルをまったく学術的要請に応じるものとみなしている。それどころか彼は、自らの名において「数学的手法」を弁護している。数学的手法は——ゲーテが綱領的な論文「客観と主観の仲介者としての試み」において強調しているように——「慎重、熱心、厳格、ましてやこせこせして実行される」ことはありえないと。「資料は」とゲーテは続ける、「列をなして整理され、配置されていなければならない」。だが「列をなして」とは、ゲーテにとって「固定された体系」のことではない。生物学的発見が増えていく豊富な資料を一貫した分類作業により区分けしようとしたリンネ

とは異なり、ゲーテが信服したのは、しっかりと継ぎ合わされた術語ではなく、対象とともに絶えざる展開の一端を辿る術語である。

自然の万物、だが特に低次の力と元素は、永遠の作用と反作用のなかにあるので、いかなる現象についても、それが無数の他の現象に結びついていると言えよう。（……）それゆえ、いかなる試みであつてもそれを多様に繰り広げることが、自然研究者の本来の義務である。

さて、ゲーテによれば「いかなる事態でも、それを締めくくるだけの十分な能力を備えた人はいない」ことが出発点になるので、諸観察とともに諸概念もまた、絶えず修正されなければならない。

修正を加えられる自然科学的列形成の概念は、喚喩的象徴法が原則的に未完結であることと理論的に対応している。自然現象は最終的な説明が施されるものではなく、際限のない説明の過程で、何度でも新たな解釈がなされるものである。とはいえ、そこから出発すると、理解は深まる一方であるという期待は正しいものであるとは言えない。その出発点は、自然研究者の言語的な列形成と「生きたものの列」が同一視されることが前提となっている。ファウストは、自らの観察が自然現象をうまく描き出していると信じている。

この立場を認識論的な考え方に導けば、「素朴なりアリズム」の考え方が考慮に値する。それは「知覚の内容と知覚されたものの即自的なあり方が一致する」という一つの「考え方」を特徴とするからである。これはまさに、自然研究者に対して「判断材料を、それ

自体ではなく、観察する事物の領域から導く²¹」ように求める、古典主義以前のゲーテに当てはまる。これによりゲーテは、後に接近するとはいえ、このときまだ未知のカント主義者の立場からはつきりと身を隔てる。ゲーテの「前批判期」の態度は、普遍論争に関連づけられ、次のように規定される。一般概念は事物と並置されて存在するのではなく——一般概念が事物の前に定められた(「事物より前に普遍」)(「实在論」)にせよ、後から事物に付けられた(「普遍とは名目」)(「唯名論」)にせよ——事物と共にのみ(「事物のなかにある普遍」)存在する。自らの立場の思想的背景を、ゲーテははつきりと自覚している。スピノザ論争への態度表明として一七八五年六月九日に、彼はフリードリヒ・ヤコービ宛にこう書いている。「神的存在が話題になるとき、口を閉ざしたくなるのをお許しください。私はそれを個々の事物のなかと、そこに由来するところにか認めることができません」。この見解に応じて、以下のことが芸術に期待されている。

芸術が事物の諸性質、事物のあるがままの性質を、より一層正確に知ること、芸術が諸形態の列を見通すこと、さまざまな特徴ある形式を比較し、模倣する術を心得ていること²²。

つまりここでゲーテは、模倣の原理に信頼を寄せている。自らの身を自然に委ねたときのみ、自然はその法則性を明らかにしてくれるという、証拠となるものの確かさが前提条件となるのである。こうしたリアリズムは、口語的な意味での素材さとはむろん何の関

係もない。確かにゲーテは後に、ゲーテが「素材詩人である」というシラーのレッテルの影響下で、自らそのように様式化し、こう述べている。自分はカントに到達するまで主体と客体を「一度も区別したことがなかったし、私が自分のやり方で対象についてあれこれ考えたとき、それと意識はしない素材さでそうしてきたし、実際、自分の考えが目の前に浮かんでいるように思えた²³」。だが、カント哲学の受容期以前のこれまで引用したテクストに見られる、認識の主観性、客観性の両面から正確に区別された状況規定から分かるのは、この点についてゲーテは完全に区別することができたということである。ゲーテの認識論的な立場が素材と呼べるのは、本人が自らにそうした根拠があることを認めているという点だけである。ゲーテの美学もこの認識論的基礎に基づいている。前批判期のゲーテにとって、「様式は、認識のいちばん深い基盤にあり、事物の本質が可視的で把握できる形態をとり、その認識がわれわれに許される限りにおいて、事物の本質にある²⁴」。

自然の本質が認識できるというゲーテの確信について、そのもつともはつきりした表現は、ファウストの独白と多くの類似した例を提示している彼の論文「花崗岩について」のなかに見られる。そのファウストの独白が、秘めやかな対話として与えられた自己啓示について「崇高な霊」に感謝しているように、花崗岩論では「低く語りかける大自然の近くで、その孤独と沈黙が与える崇高な恵²⁵」が描かれている。この論で条件として挙げられているのは、「真理が与える最古の、第一の、もっとも深い感情にのみ心を開こうとす²⁶」人であるが、独白のほうでは、「自らの胸に／秘めた深い奇蹟

が開かれる」のを経験するファウストのような人によってその役割が果たされる。主体は——またはや花崗岩論では——「天上の影響がいつそう身近に（主体を）囲んで漂う（……）瞬間に、自然をもっと高みから考察したい気持ちになり」、具体的な自然現象から、歴史的な意味での沈潜に向かう。そして花崗岩の岩が「時代の記念碑」に見えてくる。意味は明瞭ではないが、ファウストにも「岩壁から（……）前世のさまざまな銀色の姿が浮かぶ」。

さて、主体が自然とともに内属的状况へと移される、この内的浸透の状態は、当然のことながら長くは続かない。ファウストが静かな考察意欲をもち、諸感覚が解放されるなかで沈黙の一瞬を楽しんで後に——字面では中間休止によって示されるが、俳句ならば通例、切れ字を置くところだろう——、独白は雰囲気が一変して、まったく別様に進行する。

ああ、人間には完全なものなど与えられないと、私は今感じている。おまえは、私を神々に

ますます近づけてくれる歓喜に添えて、
あの道連れを与えてくれた。この道連れを私はもはや、
手放すことができない。あいつは冷たくも厚かましく

私を私自身に対して卑屈にし、
一語の息吹で、おまえの贈り物を無に変えてしまうのだが。

(三二四〇—三二五〇行)

ここで描かれるものは、ファウストの筋の継続上必要というだけ

のことではない。ファウストが体験するものをメフィストが「一語の息吹」で無に帰すことができるなら、これは基本的には、素朴なリアリズムの欠陥を描いている。根拠となる自らの経験の確かさを説明することが必要となり、内属的状况の内的浸透は壊滅的な影響を受ける。それはただの妄想、背後から駆り立てるように自然法則の論理を出現させる投影図に見えてしまう。ファウストがマルガレエテとの最初の出会いから、「秘めた深い奇蹟」を開いてくれた自然へと持ち込んだ、他者に対して心を開くような愛情は、メフィストが説明を強制するなかで、性行為の志向へと還元されてしまう。この志向が、共同的状况のもつ名状しがたい含蓄を破壊するのである。

ファウストはメフィストに抗うことはできたのだろうか。
ヘルマン・シュミッツに従うならば、婚約者への手紙におけるヘーゲルと似たように、ファウストは意見を述べたかもしれない。つまり説明の要求に対し、これを慎重に拒否することで抗うようにと。

ゲーテは別のやり方をした。ゲーテはイタリア旅行中、プラトニックな恋愛の苛むような一〇年の後に生涯で初めて、性的欲望に身を任せる。同時に、具体的な植物のなかに原植物を見つけたことができるという観念をイタリアで徐々に論める。次いでシラーが、ゲーテが感覚的に経験可能であると考えていたものを理念と考えるカント的な思想に馴染ませてくれることになる。ゲーテはこの思想をまったく独自に特徴づけたにせよ、原則的には受け入れた。彼が素朴なリアリストから批判的リアリストへと変化したのは、科学と芸

で、「そう、待つのだ。やがておまえもまた思うだろう」と話
しました。三〇秒ほど黙して、もう一度窓越しに暗い片楡の森
を眺め、続いて私のほうに向き直り、こう言いました。「さあ、
出ようか」。

アールが何年も後に書き留めた通りのことが起こったのかわ
か、われわれは知りえない。——ゲーテ自身はツェルター宛の簡單
な報告のなかで、詳細については口を閉ざしているのだから。しか
しおそらく、五〇年以上前の旺盛な活動期の筆跡を「認知した」と
き、彼が何を感じたかは想像に難くない。ゲーテが——自らの死を
予期しながら——簡素な詩行のなかにとらえていた戀いの予感、
人生の黄昏を迎えた今、実現に近づいていた。この一行目の「すべ
ての頂に戀いあり」は拡大された意味を担っていた。それは「私の
生き方のピラミッドを（……）できるだけ高く空に突き上げる」と
決意を表した時代への回顧であり、ゲーテはいまや、この決意を振
り返りながら、完全に相解するようにこう特徴づけている。「これ
ほど長い年月を経て、続いたこと、消えたことが判断できるように
なりました。成功したことは姿を現し、楽しませてくれました。失
敗したことは忘却に付され、克服されていきました」。この状況下、
いつもなら日々の作品に多くの言葉を並べて仕上げようと努力する
ゲーテも、表現できることの彼方でわれわれに語りかけてくる自然
の静寂について、感覚を開放してこれを察知するためには、どうし
ても沈黙するしかなかった。シエーベルトの「夜の歌」の作曲から
して、ゲーテにとっては「口数が多すぎる」のだった。

術の分野における自らの努力に、より確固たる根拠を身えるためである。古典期のゲーテの象徴法は、人間界と自然界の一致をまは存在の連続性の要因として捉えるのではなく、客体に与することを主体に留保させる『判断力批判』が言うところの類推 (Analogie) として捉える。

こうして新たに根拠が確かなものとなり、ゲーテは自然科学上の立場、芸術論上の立場を定めることになるが、われわれがそこに立ち入るのは見合わせざるをえない。とはいえ、そうしたカントから教示を得た説明の長所は、印象から得る特性を喪失することで獲得された。ヴァイマル期最初の一〇年の自然抒情詩を手がかりに見て取ることができたのは、より深い意味を語ることなく、ただ静かな考察に身を委ねる状況体験である。これをわれわれがゲーテの後の詩のなかに探しても無駄なのである。

しかしゲーテは、特に『さすらい人の夜の歌』の感覚の静けさに表れているような印象から得る特性への嗅覚を失ったことはないし、その歌に対する感情を伴った思い出も残っていた。ゲーテが最後の誕生日の前夜に、キツケルハインの山小屋を再訪することを願ったのがその証左である。鉛筆での『夜の歌』の記述は、板壁にまだ見ることができた。ゲーテに随行した鉱山官ヨハン・クリステイアン・アールは、その場面を以下のように述べている。

ゲーテはこの数行の詩に慌しく目を通しました。彼の頬に涙が流れました。暗褐色の毛織の上着から、非常にゆっくりと真っ白なハンカチを取り出し、涙を拭い、穏やかに悲しげな口調

原注

- (1) Takahashi, Yoshito: Japanische Lyrik: das Haiku und die lebendige Leerheit. In: Universitas - Zeitschrift für Wissenschaft, Kunst und Literatur Jg. 39 (1984), S. 1199-1206.
- (2) 『ファウスト』についての拙著(Naturbild und Diskursgeschichte. 'Faust'-Studie zur Rekonstruktion ästhetischer Theorie; Stuttgart 1992, S. 257-283)のなかですでに、その時代のゲーテの自然像については仔細に検討してきた。そこから幾つかを取りあげるが、執筆当時は未知のものであった「日本的」視角を通して、それらの内容は充実した。
- (3) Schmitz, Hermann: Hase und Igel. Vom Pech des unbescheidenen Analytikers. In: Adamowsky, Natascha / Matussek Peter (Hg.)(2004): Auslassungen. Leerstellen als Movens der Kulturwissenschaft; Würzburg 2004, S. 61-68, hier S. 62.
- (4) Briefe von und an Hegel, Bd. 1, Hamburg 1952, S. 368.
- (5) Schmitz a.a.O., S. 61f.
- (6) 高橋の前掲書を参照。
- (7) 例えば、リルケの墓碑の言葉がある。以下を参照。Ebd., S. 1199.
- (8) この点については、以下を参照。Adolf Muschg: Anlässlich einer Umfrage nach Goethes Gedichten. In: ders.: Goethe als Emigrant; Frankfurt am Main 1986, S. 25-32. 確かにムシエクが、そのようなアンケートの大衆性、美学的判断を下すのに無用な統計学に反論するのはもつともである。しかしアンケートがまとめるのは、自然発生

的な愛好心であり、この関連で『夜の歌』が選ばれたことは、大変に意義深い。——計一三〇〇篇が挙げられたなかで、さらに四篇の『夜の歌』成立の背景から生まれた詩が上位を占めたのである。

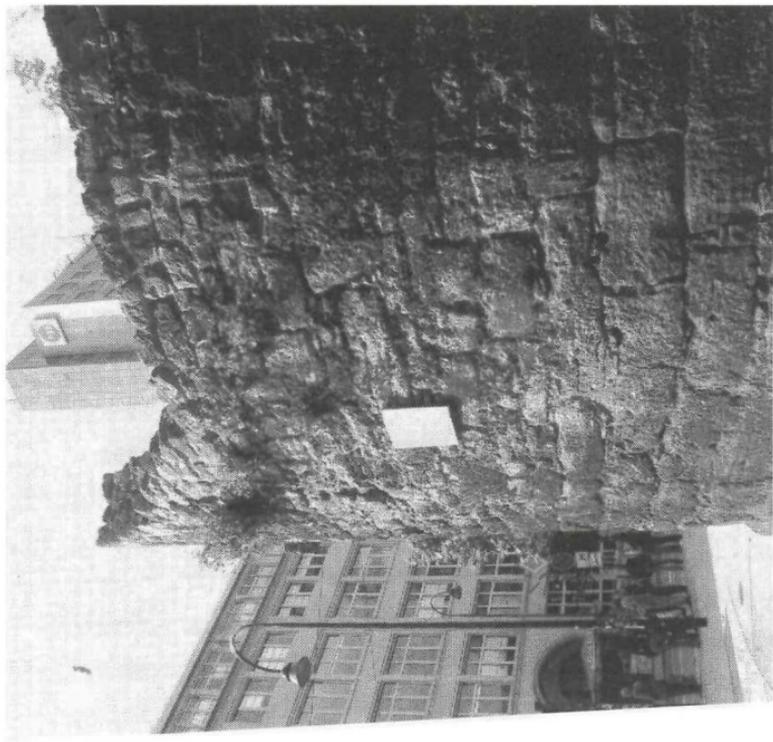
- (9) この指摘については、東京の桑川麻里生氏に謝意を表する。
- (10) WAI, 27, S. 295.
- (11) WAI, 42.2, S. 485.
- (12) Wilkinson, Elizabeth M.: Goethe's Poetry. In: German Life and Letters. N.S. 2 (1949), S. 316-329.
- (13) HA 12, S. 471.
- (14) この点について、詳細は以下を参照。Schlaffer, Heinz: Faust Zweiter Teil. Die Allegorie des 19. Jahrhunderts; Stuttgart 1981.
- (15) 本論のゲーテの書簡からの引用はすべて、日付により見つけられることができる。引用は以下に拠る。Goethe, Johann Wolfgang: Briefe. Hg. v. K. R. Mandelkow. Hamburger Ausgabe in 4 Bänden; München 1962-1967.
- (16) 以下を参照。Kurz, Gerhard: Metapher, Allegorie, Symbol; Göttingen 1982, S. 79.
- (17) 以下を参照。Jakobson, Roman: Zwei Seiten der Sprache und zwei Typen aphasischer Störungen. In: ders.: Aufsätze zur Linguistik und Poetik; Hg. und eingeleitet von Wolfgang Raible; Frankfurt am Main 1979, S. 117-141.
- (18) HA 1, S. 102.
- (19) 引用は、HA 3の行紋に基づく。
- (20) HA 13, S. 149.

- (21) Ebd., S. 154.
- (22) Ebd., S. 582.
- (23) Pörksen, Uwe: Deutsche Naturwissenschaftssprachen; Tübingen 1986, S. 82.
- (24) HA 13, S. 20.
- (25) Ebd., S. 17 f.
- (26) Halbfass, Wilhelm: Kritischer R[ealismus] / Naiver R[ealismus]. In: Ritter, Joachim / Gründer, Karlfried (Hg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie. Bd. 8 R-Sc; Basel Stuttgart 1992, Sp. 159-161, hier Sp. 160.
- (27) HA 13, S. 10.
- (28) HA 12, S. 32, Hv. P.M.
- (29) HA 13, S. 26 f.
- (30) HA 12, S. 32.
- (31) HA 13, S. 255.
- (32) Ebd.
- (33) Ebd.
- (34) 以下を参照。 HA 10, S. 538-542.
- (35) 以下を参照。 HA 13, S.25-30.
- (36) Goethes Gespräche. Auf Grund der Ausgabe und des Nachlasses von Flodoard Frhrn. von Biedermann ergänzt und hg. v. Wolfgang Herwig; 5 Bde. (in 6) München 1998, Bd. 3, S. 811.
- (37) 一八三一年九月四日付ソエルター宛書簡
- (38) 一七八〇年九月二〇日頃のラヴァーター宛書簡

(39) 一八三二年九月四日付ツェルター宛書簡

(40) この見解や他にもこのテキストに採じられた多くのことは、京都の高橋義人氏との親しい会話に負っている。ここに心からの謝辞を述べたい。

(いそぎき こうたろう・ドイツ文学)



ヒトの顎間骨をゲーターテが発見した骨の埋まっていた石壁、イエーナ